

ブリヤ＝サヴァランにおける 「ジェネジック *génésique* の生理学」の萌芽

宮 川 知 子

はじめに

本稿においては、ブリヤ＝サヴァラン *Physiologie du goût* 『味覚の生理学』⁽¹⁾ (1825) において提示されたジェネジック « *génésique* » の概念について、サヴァランのものした官能小説との関わりから論じる。

ブリヤ＝サヴァランはその著書『味覚の生理学』(1825) のなかで、五感の一つである味覚について、それを単なる生理学的な感覚として捉えるだけでなく、人間関係やその社会をも含めた広い範囲で再定義し、観察に基づいた科学的な手法によってそのメカニズムを解明した。

また、同著の中でサヴァランは、味覚に並ぶ第六の感覚としてジェネジックを取り上げた。『味覚の生理学』においては、このジェネジックは、味覚の分析に入るより前に触れられており、そのことからサヴァランが非常に重要な感覚としてジェネジックを位置付けていたことがわかる。この「生殖感覚」、もしくは「肉体愛」と訳される « *génésique* » という語は、語源辞典によると1825年が初出であり、サヴァランの造語であると言われてきた⁽²⁾。

ところがこの言葉には、実は医学的な文脈の中で、サヴァラン自身が使用するよりも前の使用例が存在する。1801年刊行の『大いなる人間生成 *Mégantropogénésie* に関する新論』*Nouvel essai sur la Mégantropogénésie* および、複数の医師たちによる年鑑 *Annales de littérature médicale étrangère* に収められた1813年の報告書がその使用例である⁽³⁾。医学への関心の深かつ

(1) BRILLAT-SAVARIN, *Physiologie du goût*, présentation de Jean-François Revel, Champs classiques, Flammarion, 1982. 以下、P. G. と略記する。日本語訳は、関根秀雄、戸部松美による既訳（『美味礼讃』、岩波書店、1967年）に拠り、必要と思われる箇所にかんして、また文脈に応じて適宜、訳を改めた。また、玉村豊男訳、（『美味礼讃』上下巻、中央公論社、2021年）についても確認をした。なお表題については、*Physiologie du goût* をそのまま訳し、『味覚の生理学』とした。

(2) *Le Robert Dictionnaire Historique de la Langue Française Tome II*, sous la direction de Alain Rey, 2000, article « *génésique* ». 浦上祐子は、サヴァランの受けたビュフォンの『博物誌』からの影響を明らかにしつつ、ジェネジックをサヴァランの造語であるとし、そこには *genèse* 「創造と生成」の意味が込められていることを述べ、それが味覚と密接に関わっていることを示した。（浦上祐子、「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における「味覚」— *génésique* という概念をめぐる—」、『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』、第20巻、2017, p. 40）。

たサヴァランは、医学文献の中で、この語を目にしたことがあったに違いない。サヴァランが『味覚の生理学』のなかでジェネジックについて、第六の感覚とし、味覚と同様の位置付けを行っていることは先に述べた。つまり、サヴァランにとってジェネジックは、単なる「生殖感覚」以上の概念であり、味覚同様、観察に基づいた科学的な分析を行うべき対象であったと言えるだろう。

味覚のように「生理学」としての分析を行い、一つの書籍を完成させることはなかった感覚ジェネジックではあるが、サヴァランは自身で数篇の短編官能小説を書き溜めていた。このなかで現存する唯一の掌編「アラスへの旅」*Le Voyage à Arras* には、サヴァランが著すことのなかった「ジェネジック gènesique の生理学」の片鱗が見られるように思われる。

本論では、この掌編を読み解き、サヴァランが『味覚の生理学』で著した味覚のあり方と重なるような形でジェネジックを表現していることを明らかにしたい。

I. ジェネジックの語とその意味の変遷—サヴァラン以前と以後

サヴァランは、『味覚の生理学』において、最も単純な「個の保存」を目的とした「食べる快楽」の先に、会食者との楽しい時間や会話が不可欠な要素となる「食卓の快楽」を加え、それらを詳細に表している⁽⁴⁾。

味覚が舌という感覚器官を通して感じる感覚から、「食卓の快楽」までを含む感覚として位置付けられるのであれば、ジェネジックもやはり生殖器官を通した感覚から、さらに多くの広がりを持つ感覚となるだろうというのが、サヴァランの主張であろう⁽⁵⁾。

サヴァランは、「種の存続」を目的としたいわば、単純な「肉体的快楽」から出発して、「ロマネスクな恋愛」を含むだけでなく、さらにその感情を実際に抱いているかどうかにかかわらず、好かれようとする意図で用いられる仕草や言葉、といった意味を持つ「コケットリー」に至るまで、つまり恋愛期間や恋愛の駆け引きまでも含めて、ジェネジックとして定義しようとしていた⁽⁶⁾。浦上は、サヴァランが味覚とジェネジックに人間の持つ「精神」を介入させることにより、この2つの感覚という「最も動物的感觉こそ、動物から最も人間を引き離す、高尚で美的な文明や文化を創造し、それによって人類の特徴をなす知的で洗練された文明社会が生成される」と述べている⁽⁷⁾。

では、サヴァランは、どのような経緯でジェネジックという言葉を選択し、この広い概念を表すためにそれを用いたのか。サヴァランの造語であるとされてきたジェネジックの語であるが、

(3) 宮川知子, 「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかに関与したか」, 早稲田大学大学院 文学研究科紀要 第70輯, 2025, p. 311.

(4) 『美味礼讃』上巻, p. 59. (P. G., p. 44), p. 238. (P. G., p. 170).

(5) 宮川知子, 前掲論文, p. 312.

(6) 宮川知子, 前掲論文, p. 313.

(7) 浦上祐子, 前掲論文, p. 45.

先に述べたように、この語には、医学的な文脈においてサヴァランが使うより前の使用例が見られる。

そもそもサヴァランは、医学に対し、ひとかたならぬ関心を抱いていた⁽⁸⁾。学生時代に遡れば、法学の勉強の傍ら現役の医師より「家庭医学」を学び、郷里の医師たちとは密な交流を重ね、その医師たちとの交流に関しては、『味覚の生理学』の「伝記」の部分で詳細に示されている⁽⁹⁾。また、人生の後半にパリに出てからも「イデオログ」の医師らとの親しい交流があった。それゆえ、サヴァランが当時の医学文献に目を通していても不自然なことではない。

サヴァランがジェネジックの語を使用する以前の使用例の一つは、1801年刊行の『大いなる人間生成 *Mégalandropogénésie*』に関する新論、すなわち才気走る子供を作り、偉大な人間にする技術—アリストテレス、ポルタ、ラヴァーターによって記された彼らを見分けるための顔相学的特徴を付す』*Nouvel essai sur la Mégalandropogénésie ou l'art de faire des enfants d'esprit, qui deviennent de grands hommes, suivi des traits physiognomoniques propres à les faire reconnoître décrits par Aristote, Porta et Lavater*と題された書籍である。ただし、ここでの使用は、厳密にはジェネジック *« génésique »* そのものの語ではなく、*Mégalandropogénésie* という造語の中に含まれた *-génésie* である⁽¹⁰⁾。この書は、刊行後すぐに評判となり数カ国語に翻訳され、1803年に増補版の第二版が発行されている⁽¹¹⁾。このことから、当時、いかにこの書が人々の関心を惹くものであったかが窺われる。

表題に見られるメガラントロポジェネジ *« Mégalandropogénésie »* とは、ギリシャ語由来の言葉で、「大いなる人間の生成」を指す。優生思想の先駆けともいえるこの著作は、国家が科学的、制度的にエリート人材を生み出すことを目的としていた。序文において、著者は自身が影響を受けた思想家としてビュフォンを挙げている。ビュフォンは、18世紀フランスの作家にして博物学

(8) 宮川知子,「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』と医学——素人医者としてのサヴァランと家庭医学：節制と食の悦び——」, 早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL No.12, p. 69-88, 2025.

(9) 『美味礼讃』上巻, p. 33-38. (P. G., p. 27-31).

(10) この *génésie* の語は、仏英辞典 Cotgrave にも載っており、生成や生誕の意味を持つ。(Cotgrave, *A dictionnaire of the French and English tongues*, A. Islip, 1611, article *« génésie »*). また、16世紀の医師でもあり、作家であったラブレーによる『ガルガンチュアとパンタグリュエル』にも *palingénésie* の語が見られ、再生、復興の意味で用いられている。そして、サヴァラン自身も『味覚の生理学』の中の「ヴァリエテ20、シュヴァリエとアベ」において同様の意味を持たせて、*palingénésie* の語を使用している。無論ここには、ジェネジックとしてサヴァランの定義した「生殖感覚」や「肉体愛」という意味合いはない。

(11) Robert le jeune, *Nouvel essai sur la Mégalandropogénésie ou l'art de faire des enfants d'esprit, qui deviennent de grands hommes, suivi des traits physiognomoniques propres à les faire reconnoître, décrits par Aristote, Porta et Lavater*, tome I, seconde édition, chez Le Normant, 1803. 著者である、医師であり思想家のロベール・ル・ジュヌの言葉を借りれば、この第二版においては「同じ著者の手によるものとは思えない」ほどの改訂が加えられたという。(Robert le jeune, *op. cit.*, p. iij. *« Je puis le dire, mon travail actuel, comparé à l'ancien, semble ne plus appartenir à la même plume »*).

者であり、1749年から刊行された全36巻にわたる『博物誌』でつとに知られている。その内容は多岐に亘り、動物、植物、鉱物、人間、地球など自然全般にわたる広範な解説がなされている⁽¹²⁾。サヴァラン自身も、ジェネジックについて述べるにあたり、「これほど重要な生殖感覚も、ほとんどビュフォンにいたるまでは無視されてい⁽¹³⁾」た、と述べている。つまり、ジェネジックという言葉を使用するにあたり、両者ともにビュフォンの思想が念頭にあったことがわかる⁽¹⁴⁾。

ロベール・ル・ジュヌはその序章でこう述べる。

私は、魔法や妖術のようなやり方で、才ある子どもを生み出せるなどと主張したことは一度もない。私は占い師でも、奇跡を起こす聖者でもないのだ。また私は、普通の人間が、神話に登場する古代の神のように、自分の頭からミネルヴァを、また太ももからバックスを生み出すような奇跡を繰り返せるとは思っていない。ただ私は、才ある男性と才ある女性が結婚すれば、彼らの子どもが愚か者でない可能性は極めて高い、とittedただけなのだ⁽¹⁵⁾。

これに対してサヴァランは『味覚の生理学』の中の省察「美味学について」において、「学問というものは、ユピテルの頭の中からすっかり武装して出てきたというミネルヴァとは違う。それは、時間の娘で知らず知らずのうちに形成されるのである」と述べている。このミネルヴァを使用した比喩は、当時よく使用されたものであるとはいえ、サヴァランはガストロノミーを含む学問一般は、醸成に長い期間がかかると述べ、ロベール・ル・ジュヌも連綿と続く遺伝の影響を人間生成に当てはめている。

また、このロベール・ル・ジュヌの著作には、ラヴァーター⁽¹⁶⁾の顔相学の影響が色濃く見られ、作者自身もラヴァーターを顔相学の権威として位置付けている。タイトルに「アリストテレス、ボルタ、ラヴァーターによって記された彼らを見分けるための顔相学的特徴を付す」

(12) Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Paris, Larousse, (1866-77), p. 1390-1392.

(13) 『美味礼讃』上巻, p. 51. (P. G., p. 39).

(14) 浦上は、「人間の性を自然なものとみなし肯定するビュフォンの思想」がサヴァランに受け継がれたと述べている。(浦上祐子, 前掲論文, 2017, p. 40).

(15) Robert le jeune, *op. cit.*, p. j-ij. 拙訳とする。« Je n'ai jamais prétendu produire des enfans d'esprit comme par une espèce d'enchantement et de magie je ne suis ni devin, ni thaumaturge, et je sais qu'il n'est pas donné à un simple mortel de renouveler le miracle de cet ancien dieu de la fable, qui put, à son gré, faire sortir Minerve de son cerveau et Bacchus de sa cuisse. Mais j'ai dit qu'en mariant un homme d'esprit avec une femme d'esprit, il était plus que probable qu'ils auraient des enfans qui ne seraient pas imbéciles. »

(16) ヨハン・カスパー・ラヴァーター (1741-1801) はスイスの牧師であり、作家。顔の特徴から人を知る「顔相学」についての書籍を著した。図版などを多く取り入れた『顔相学断章』のフランス語版 (1781-87) を契機に、フランスでも広く読まれるようになった。顔相学は、「医学、生理学的観察」と「芸術的関心」の両方を満たすものとして、フランスで受容された。Martial Guédron, « Physiognomonie et idéologie. Autour de l'édition de Lavater par Moreau de la Sarthe », *Regards croisés* [En ligne], octobre, 2020, mis en ligne le 25 août 2023, <http://journals.openedition.org/regardscroises/535>.

« *suivi des traits physiognomoniques propres à les faire reconnoître décrits par Aristote, Porta et Lavater* » と明示されていることから、この著作におけるラヴァーターの思想からの理論的継承は明らかである。

さらにロベール・ル・ジュヌの著作には、「傲慢なもの」、「怒りっぽいもの」、などの数々の分類の中に、「グルマンたち」の相貌が記述されている。その記述は、「みぞおちの領域（上腹部）が胸郭部よりも長く、顔はパン・デピスか蜂蜜のような色をしており、口は大きく裂けていて、歯は鋭くて長く、外に突き出ている」と記された後、さらに外的な描写が続き、「最後に、彼らはいつも豪勢な食事の話をし、口にいつも唾液が溜まっている」という言葉で閉じられている⁽¹⁷⁾。

実はサヴァラン自身も、『味覚の生理学』の中で何度かラヴァーターについて触れており、自身をその学派であり、「先天的素質を信じる」のだと述べている⁽¹⁸⁾。そして、味覚を含む官能の味わいを享受するよう生まれついた、先天的グルマンに関して、「概して中肉中背で、丸顔もあり四角い顔もあるが、目はキラキラと光り、額は狭く、鼻は低く、唇はぼつてりとしてあごには丸みがある⁽¹⁹⁾」と述べる。また、省察十二「グルマンについて」においては、「顔だけは、やや丸みがあり、あごはいかつく、唇は厚く、口はおそろしく大きかった」公爵のことを「先天的な美食家であり、また女ずきであると断定し」ている⁽²⁰⁾。

ラヴァーター他の顔相学に倣い「大きく裂けて」いるとロベールの表した口は、サヴァランでは、「おそろしく大き」と記述されている。しかしながら、サヴァランによるグルマンの様相は、ロベール・ル・ジュヌの描くグルマンとこの口以外に共通するところはない。

先に見たように、ロベール・ル・ジュヌの描くグルマンの相貌はグルマンに批判的である。これは顔相学とはいいいながらも、当時の社会においてグルマン « *gourmand* » の語の持つ、否定的な意味合い⁽²¹⁾を色濃く反映したものであるように思われる。

サヴァランは、『味覚の生理学』の中で、久しく卑しいものとして認識されてきたグルマンを擁護し、グルマンディーズを称揚し、美味学を打ち立てたのであるが、その中でラヴァーターの顔相学を自身の主張に沿わせる形で、上手く利用しているように思われることは興味深い。

ジェネジックのもう一つの使用例は、複数の医師たちによる年鑑 *Annales de littérature médi-*

(17) Robert le jeune, *op. cit.*, tome II, p. 204., p. 458. « Ils ont la région épigastrique plus longue que la thoracique, le visage couleur de pain d'épice ou de miel, la bouche fort fendue, les dents aiguës, longues, sortant en dehors, la parole grosse et débile, le cou gros, les côtes grêles et vides, les mains petites, minces et tortues, les yeux obscurs, se remuant de côté et d'autre ; ou tressaillans, enflés autour, ou grands, fixes et un peu rouges ; enfin ils parlent toujours des grands repas, et ont la salive à la bouche. »

(18) 『美味礼讃』上巻, p. 209. (*P. G.*, p. 150)., 下巻, p. 60. (*P. G.*, p. 233).

(19) 『美味礼讃』上巻, p. 210. (*P. G.*, p. 151).

(20) 『美味礼讃』上巻, p. 212. (*P. G.*, p. 153).

(21) 橋本周子は、グルマン / グルマンディーズの語が悪徳から美徳へと変遷する時期を18世紀半ばから19世紀初頭と述べている。(『美食家の誕生』, 名古屋大学出版会, 2014年, p. 13)。

cale étrangère に収められた1813年の報告書である⁽²²⁾。ここでは、医師であるデュシーとグロの両氏による報告として、顕微鏡により微小生物が、完全な生命を持つことを証明し、液体の中で動き、消化し、生殖する様子を報告する⁽²³⁾。また、そこには、微小生物の「生成」という文脈でジェネジックの語が使用されている。

一方で、物理的・実験的・顕微鏡的な分析の知は、「生成的な操作」« opération génésique »へと導き、いわば人間を自然の聖域へと招き入れる。この分析法は、生命原理の解体を目的とするのではなく、既に組織された分子、あるいは組織され得る分子を、さまざまな段階で開花させること、あるいはそれらがまさに組織される瞬間の状態を提示することを目的としている、と著者は述べる⁽²⁴⁾。

また、この報告書には、イデオログの医師で、サヴァランとも面識があったと思われるアリバール⁽²⁵⁾も登場する。デュシーはアリバールの前で、この顕微鏡を使った実験を行ったというのである⁽²⁶⁾。アリバールはイデオログの医師の一人であった。イデオログたちと親しく交流をしていたサヴァランであるから、彼らとの関わりの中で、この実験について耳にする機会があったのかも知れない。この頃、18世紀後半に開発された顕微鏡を使用した最先端の研究により、目視できない生物の生態が明らかになってきた。いみじくもサヴァランは、『味覚の生理学』、省察1「感覚について」において、以下のように述べている。

顕微鏡は、初めて我々に物体の内部的配置を知らせた。我々がその存在さえも知らなかった微生物や植物などを我々に見させた。とにかく我々は、肉眼で見られる動物の中の最も小さなものよりも十万倍も小さな動物を見たのである。しかもそれらの小動物が、動きもするし

(22) MM. Kluyskens. Duber, Vrancken, Rasoli, *Annales de littérature médicale étrangère et Précis des Conférences du Cercle Médical de Paris*, l'imprimerie de P.F. de Goesin-Verhaeghe, Gand, 1809, p. 502.

(23) MM. Kluyskens. Duber, Vrancken, Rasoli, *op. cit.*, p. 496. « M. Ducy démontre que la vivacité avec laquelle ils se meuvent dans le liquide qui leur convient, la manière dont ils digèrent, dont ils se reproduisent, dont ils se poursuivent et saisissent leur proie, sont autant de preuves de leur vitalité parfaite. »

(24) MM. Kluyskens. Duber, Vrancken, Rasoli, *op. cit.*, p. 502. 拙訳とする。« Le flambeau de l'analyse physique expérimentale microscopique, au contraire, conduit à une opération génésique et introduit l'homme, pour ainsi dire, dans le sanctuaire de la nature. Loin d'opérer la désorganisation du principe vital des êtres, dit l'auteur, cette science n'a pour objet que d'épanouir à divers degrés les molécules organisées, ou susceptibles de l'être, ou de les présenter dans l'acte même de l'organisation. »

(25) 宮川知子, 「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』と医学——素人医者としてのサヴァランと家庭医学：節制と食の悦び——」, 早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL No.12, 2025, p. 72.

(26) MM. Kluyskens. Duber, Vrancken, Rasoli, *op. cit.*, p. 497. « ...Mr Ducy a fait voir plusieurs fois l'été dernier en présence de Mr Alibert:... »

食もとるし殖えもする。だからそれらは、我々の想像も及ばない微細な器官を備えているものと察せられる⁽²⁷⁾。

この言葉からもわかるように、サヴァランが当時の医学の先端的な研究にも目を配っていたことは確かといえよう。

以上のことから、サヴァランが、彼が使用する以前にジェネジック « *génésique* / -*génésie* » の語の使われた上記の2つの文献に目を通していた可能性は高く、それらから着想を得て、第六の感覚としてジェネジックの語を使用したのではないかと考えられる。この語は当然、19世紀ラールスにも載っており、「生成および生殖機能にかんするもの」と記され、文例として「トリュフはジェネジックを誘う（トリュフは性的快楽を促す）」« *La truffe dispose aux plaisirs génésiques* »というサヴァランの言葉が引用されている⁽²⁸⁾。加えて、1842年発行の医学辞典には、五感に加えて「第六感を、必要に応じて加えることもできる。この第六感は、ブリヤ＝サヴァランによって『生殖感覚』と名付けられている」という記述が見られ、サヴァランがその意味を広げようとしたジェネジックの定義が、この時期になると医学の分野にまで浸透し始めていたことが窺われる⁽²⁹⁾。

Ⅱ. 官能小説「アラスへの旅」における第六の感覚ジェネジック

これまで見てきたことから明らかであるように、先に表したサヴァランの使用以前に使われた、2つの文献の中でのジェネジック « *génésique* / -*génésie* » の言葉は、それが人間に対してにせよ、微小生物に対してせよ、あくまで医学的文脈に沿った、「生成」の意味で使用されており、サヴァランが『味覚の生理学』で五感に続く第六の感覚として最初に定義した「生殖感覚」あるいは「肉体愛」という意味は持たなかった。

サヴァランが味覚を生理学的な感覚として捉えるだけでなく、人間関係やその社会をも含めた広い範囲で再定義したことは先に述べたとおりである。『味覚の生理学』においては、まず、舌の運動などの味覚を感じる器官の詳細な説明が行われた後に、その生理学上の味覚の概念をさらに広げ、「食卓の快楽」までをも含む感覚としてそれを位置付けた。

サヴァランが第六の感覚として定義したかった「生殖感覚」を表す言葉を、当時、医学文献の中で使用された語、「ジェネジック」から借用したのであれば、それこそは、やはり「生成」に

(27) 『美味礼讃』上巻, p. 55 (P. G., p. 42).

(28) Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Paris, Larousse, (1866-77), p. 1143.

(29) Antoine François Hippolyte Fabre, *Dictionnaire des dictionnaires de médecine français et étrangers ou Traité complet de médecine et de chirurgie pratiques*, Société Encyclographique des Sciences Médicales, Bruxelles, 1842, p. 150. この医学書においては、ジェネジックについて「繁殖という行為において活性化される純粋に動物的な感覚」と記述されており、生理学的な「生殖感覚」を定義している。

つながる行為の全てを多角的に分析したいという意図の現れでもあるのではないか。サヴァランが味覚に対して行ったように、生理学的な文脈からさらなる意味の拡張を試みようとしたと思われるのである。

サヴァラン自身は、「個の保存を目的とする味覚が一つの感覚に違いないとすれば、種の保存をその目的とする器官には、なおさらのこと感覚という称号を与えなければならない⁽³⁰⁾」と述べている。また、バルザックも「この第六の感覚の及ぼす影響は彼の主題にとって極めて重要なものであることは確かだ⁽³¹⁾」と述べているように、ジェネジックはサヴァランにとって重要な主題であった。しかしながら、サヴァランは、その詳しい在り方については、「我々の孫たちの考えに任せ⁽³²⁾」と『味覚の生理学』で締めくくる。先のバルザックも、「サヴァランは、第六の感覚の生理学も求めたが、この非常に繊細な内容のためか著作が不可能と思われ、それを諦めてしまった⁽³³⁾」と述べている。つまり、サヴァランは、ジェネジックについて非常に重要な主題であると認識していたにもかかわらず、時代的な要素も相まって、それを分析した作品をしたためることが叶わなかったのだといえるだろう。このように、サヴァランが著すことのなかった「ジェネジックの生理学」であるが、しかし、その片鱗を、サヴァランが自身で書き溜めていた官能小説に読み取ることはできないだろうか。

サヴァランは数篇の官能小説をものしていた。サヴァランの遠縁で、『ブリヤ＝サヴァランの郷里の食卓』*La table au pays de Brillat-Savarin*を執筆したリュシアン・タンドレは、その執筆時期を1813年から1820年頃であるとしている。全体で六篇あったとされる官能小説は、それぞれ、1/「私の最初の過ち」*Ma première chute*、2/「私の赤いズボン」*Ma Culotte rouge*、3/「サン＝カンタンの宿場」*Le relais de St. Quentin*（「アラスへの旅」*Le Voyage à Arras*からの抜粋）、4/「女鬼」*L'Ogresse*、5/「見知らぬ男」*L'inconnu*、6/「夢」*Le Rêve*である⁽³⁴⁾。そのうち現存するものは、「私の最初の過ち」および「私の赤いズボン」からの数行の短い抜粋を除けば、「アラスへの旅」の中の一部とされる「サン＝カンタンの宿場」のみである。

サヴァランの原稿は、サヴァラン没後に親族の手にわたり引き継がれ、20世紀の初頭には、サ

(30) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(31) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 101. « ... quoique les effets de ce sixième sens appartiennent éminemment à son sujet », 拙訳。

(32) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(33) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 101. « En première ligne, il faut mettre celle du sixième sens, le sens génésique pour lequel, avant lui, Sterne avait tant plaide, et qui voudrait sa physiologie aussi, mais la matière est si délicate que l'ouvrage peut sembler impossible puisque cet auteur y a renoncé, (...) », 拙訳。

(34) Dominique Saint-Pierre, *Brillat-Savarin, Œuvres, hors-d'œuvre, chef-d'œuvre*, édition complète et originale établie et annotée par Dominique Saint-Pierre, Cleyriane éditions, 2020, Tome II, p. 357-358.

ヴァランの傍系の子孫にあたるマリー・マドレーヌの手元にあった。しかしながら、その原稿を受け継いだ親族らにとっては、これらの原稿を公にすることなど考えにも及ばないことであるばかりか、親族内での禁止事項であったとされる。ところが、1926年、マリー・マドレーヌが信用して遺稿を見せた人物は、許可なく「サン＝カンタンの宿場」をおそらく売り、出版した。この官能小説の出版を極度に恥じ、且つこの行為を裏切りであると感じ、腹を立てたマリー・マドレーヌは、サヴァランの手による6篇の官能小説全てを裏庭で燃やしてしまったという。サヴァランの記した官能小説の遺稿は、このような経緯で消失してしまったのである⁽³⁵⁾。

親族にとって不本意な発表のされかたではあったものの、サヴァランの没後100年にあたる1926年に、メルキュール・ド・フランスにて発表され⁽³⁶⁾、現在、唯一残された官能小説であるこの掌編は、サヴァラン自身の実体験に基づいているとされている。1803年にパ・ド・カレー県の県知事のポストを提示されたサヴァランは、その行政拠点であったアラス « Arras »を訪ねたことがわかっている⁽³⁷⁾。結果的に、そのポストを受けることはなかったが、この時の旅によって、この残された唯一の官能小説「アラスへの旅」と題された作品がしたためられた⁽³⁸⁾。鉄道がまだ存在しない1803年当時、馬車でパリからアラスに向かうにあたって、サン＝カンタンは一般的なルートにおいて中継地とされる旅籠などがある宿場町であった。

「サン＝カンタンの宿場」は、以下の筆者による弁明文から始まる⁽³⁹⁾。

なんて馬鹿げているんでしょう！最も愛すべき、そして最も役に立つ事からの詳細を語ることがを許さない、この慣習ってものは！ピストルや剣、大砲に至るまで、毎度のごとく語られているというのに。

奥様方、これからお話しする物語には、おそらく鮮烈な情景描写が見られまじょうが、言葉遣いは慎み深いものです。ちょっとした工夫で、ラメネ神父様のお説教となりうるようなものなのです⁽⁴⁰⁾。

(35) *Ibid.*, p. 357.

(36) Marcel Rouff, article « Brillat-Savarin mort à Paris le 1^{er} février 1826 », *Mercury de France*, n° 663, t. CLXXXV, 1^{er} février 1926, p. 545-571.

(37) Dominique Saint-Pierre, *op. cit.*, Tome I, p. 213.

(38) *Le relais de Saint-Quentin, fragments du voyage à Arras* ; 句読点や綴り字の異同を含んだ複数のヴァージョンがそれぞれ1926, 1947, 1950年に出版されている。(Dominique Saint-Pierre, *op. cit.*, Tome II, p. 360). 本稿は、初出のメルキュール・ド・フランスのものに拠る。

(39) この弁明文は「サン＝カンタンの宿場」の多くの版に付されているが、消失した作品も含めたサヴァラン全ての官能小説に向けられたものであった可能性がある。Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 566. Dominique Saint-Pierre, *op. cit.*, Tome II, p. 359.

つまり、サヴァランは、官能小説として表そうとしていることは「最も愛すべき、そして最も役に立つ事から」であるものの、「慣習」によりそれを語ることが許されていない、と考えているのである。この弁明文« Plaidoyer de l'auteur »の後に、物語が始まる。「サン＝カンタンの宿場」の物語は、馬車の中継地点サン＝カンタンにおける、まだ男女の恋愛を経験したことのないルシーという少女と「教授」との束の間の関係をあらわした官能小説である。19世紀当時の馬車の旅においては、何ヶ所かの中継地点を経由して目的地に到達することが一般的であった。サヴァランは、サン＝カンタンに着くまでの馬車の中で、ルシーという娘に出会ったと思われる。ルシーもやはり、別の目的地に向かう旅の途中であった。次の馬車での出発時刻が迫っているものの、自分の荷物が行方不明になってしまったというルシーは「旅の間にあなたが私に示してくださった、たくさんのお気遣いを思い出してお願いに来⁽⁴¹⁾」た、と言って、サヴァランの部屋を訪ねるところから、物語は始まる。その荷物を引き受けることを承諾したサヴァランが、その代わりに求めたキスにより、官能小説の幕が開く。

サヴァランがその学生時代より医学に強い関心を抱いていたことはすでに述べた。『味覚の生理学』においても、サヴァランは自身について「私は、なんと言っても素人医者なのです。ほとんど偏執的に⁽⁴²⁾」と記し、法律の勉強の傍ら、現役の医師から「家庭医学」を学んでいたことを明らかにしている⁽⁴³⁾。また、『味覚の生理学』が匿名で出版された際に、その著者の名は「ある教授による」と記されていた。そして、同書の中で、サヴァランは自身を「教授」と呼び、多くの食養生を指南する。このように『味覚の生理学』に「教授」が登場するのは、ある意味自然なことであろう。しかし、この官能小説においても語り手の「私」は自身を「教授」と呼んでいるのである。

「サン＝カンタンの宿場」において教授は、初めての官能的なキスに気絶寸前の少女ルシーの状態を観察しながら、「彼女の瞳が潤みはじめ、彼女の薔薇色の頬の中に白百合のような蒼白さ

-
- (40) 「サン＝カンタンの宿場」については既訳が存在しないため、筆者が全文を翻訳し本論文の補遺とした。
« Qu'elle est ridicule ! cette espèce de convention qui ne veut pas qu'on s'entretienne avec un certain détail des choses les plus aimables et les plus utiles, tandis qu'on parle à chaque instant de pistolets, d'épées et même de canons. Dans le récit qui va suivre, vous trouverez sans doute, Mesdames, des peintures très vives, mais les mots en seront chastes, et tels, qu'en les retournant avec un peu d'adresse, l'abbé de Lamennais pourrait en faire un sermon. » 以下、本文中の抜粋部分の全てを拙訳とする。(Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 566. *Voyage à Arras, le relais de Saint-Quentin de Brillat-Savarin*, Éditions Dynamo, Pierre Aelberts éditeur, Liège, 1950.)
- (41) Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 568.
- (42) 『美味礼讃』上巻, p. 40. 文脈に合わせ、訳を変更した。« Je suis surtout médecin-amateur ; c'est chez moi presque une manie » (*P. G.*, p. 34). なお、サヴァランと医学との関係については、宮川知子、「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』と医学——素人医者としてのサヴァランと家庭医学：節制と食の悦び——」(早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL No.12, p. 69-88, 2025.)で分析を行った。
- (43) 『美味礼讃』下巻, p. 57. (*P. G.*, p. 231).

が混じっていく⁽⁴⁴⁾」と描写する。そしてそれだけでなく、わざわざ括弧付きで「教授たるもの、決してこういった観察を無駄に行ったわけではないのです⁽⁴⁵⁾」と書き添えるのである。その後も「教授」の医学的な目線による観察は続いていく。

当時の官能小説において、検閲を逃れるためによく用いられた、点のみで示された一行の後、ルシーの状態が描写されていく。「ルシーは、私の腕の中でうっとりとし身を預けていました。顔は青ざめ、目は閉じられ、頬には血の気がなく、けれども、彼女の胸は激しく鼓動していました。それこそが、気絶と卒倒の違いを示す決定的な要素です⁽⁴⁶⁾」*« ... cette dernière circonstance qui distingue la pâmoison de l'évanouissement. »*とサヴァランは続ける。この気絶を表す*« évanouissement »*と卒倒*« pâmoison »*をさきの「家庭医学」の索引で確認すると、卒倒*« pâmoison »*は、「身体および精神の力が急激に大きく低下する状態を指」し、気絶*« évanouissement »*では、そのさまざまな段階として、衰弱や虚脱、失神などが説明されている⁽⁴⁷⁾。つまり、*« pâmoison »*は気絶より前の段階であることがわかる。そして、ルシーのその状態に対して、「教授」は「私は、対処法がわかっていた」*« je connaissais le remède »*と述べる。「対処法」と訳した*« remède »*の語は、医学的用法では、「治療」を表す。また、語り手である「教授」は、ルシーを「愛おしい病人」*« la douce malade »*と表現する。そしてその「回復」*« guérison »*に向かって「処置を行う」*« opérer »*のである。教授はルシーに「美しい治療」*« une cure si belle »*を施す。さらに「私は、慌てた見習い医のようにではなく、経験豊かで熟練の医師のように慎重に動いた、*« J'opérai donc, non avec la précipitation d'un Esculape apprenti, mais avec la circonspection d'un docteur émérite... »*と自己を医者に例えてその行動を描写する。そして「これほど丁寧に施された治療が、功を奏さないはずはありませんでした⁽⁴⁸⁾」と、やはり、自身の行為を治療*« des soins »*と表現するのである。サヴァランは、このように自身の官能小説にあらわれる性行為をさまざまな医学用語を織り交ぜながら表現した。性行為をつぶさに描き、さらにそれらが相手に与える影響までも記しているにも関わらず、そのトーンはあくまでも品位を保っており、描写がいたずらにポルノグラフィックに傾くことはない⁽⁴⁹⁾。それはやはり、サヴァランが『味

(44) *« ses yeux devenaient humides et que la pâleur du lys se mêlait aux roses de son teint... »* Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 568.

(45) *« (Un professeur ne fit jamais en vain une pareille observation.) » Ibid.*, p. 568.

(46) *« Lucie restait pâmée dans mes bras, son visage était pâle, ses yeux fermés, ses joues décolorées, mais son sein palpitait avec force et c'est cette dernière circonstance qui distingue la pâmoison de l'évanouissement. » Ibid.*, p. 569.

(47) Guillaume Buchan, *Médecine Domestique ou Traité complet des moyens de se conserver en santé, de guérir & de prévenir les maladies, par le régime & les remèdes simples, tome V*, Chez G. DESPREZ, Paris, Imprimeur ordinaire du Roi, 1775, p. 829.

(48) *« Des soins si bien donnés ne pouvaient pas rester sans succès. »* Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 569.

(49) マルセル・ルフも「これらの短編は、際どくも軽やかでフランス的なユーモアに富みつつも、決して下品ではなかった」と述べている。*« ces nouvelles étaient grivoises, légères, gauloises, jamais sales. » Ibid.*, p. 566.

『味の生理学』で行った、生理学的な言葉を用いて味覚のあり方を分析したのと同じように、ジェネジックを生理学的に表現しようとしたゆえであると言えるのではないだろうか。

Ⅲ. 「ジェネジック *génésique* の生理学」

『味の生理学』においてサヴァランは、人類の「最初の感覚は純粹に直接的なもの⁽⁵⁰⁾」であり、人は「味わわずに食⁽⁵¹⁾」べたが、人類が発展してゆくにつれこの快樂も姿を変え、味覚は「食べる快樂」から「食卓の快樂」に發展したと述べる。同様に、ジェネジックについても、「荒々しく享樂した⁽⁵²⁾」だけであったものが「自己の存在を分かち合おうという要求⁽⁵³⁾」に基づいた穏やかなものとなってゆくと記述している。

また、生理学的な描写とさまざまな逸話を織り交ぜたこの書籍全体の中で、ガストロノミーとグルマンディーズに焦点を当て、味覚について以下のように表現している。「グルマンディーズとは、特に味覚を喜ばすものを情熱的に理知的にまた常習的に愛する心⁽⁵⁴⁾」であり「暴飲暴食の敵⁽⁵⁵⁾」であると。そして「わたしはこのグルマンディーズとコケットリーがともにフランス起源のものであることを大いに誇りとする。それはわれわれの極度の社交性が、われわれの最もやむにやまれぬ欲求を大いに變形した結果にほかならないからである⁽⁵⁶⁾」と述べている。先に述べたとおりコケットリーは、感情を実際に抱いているかどうかにかかわらず、好かれようとする意図で用いられる仕草や言葉、といった意味を持ち、この意味をサヴァランはジェネジックに含めようとした。つまりここには、味覚とジェネジックの明確なアナロジーが見られるのである。

先に挙げたエロティックな掌編は、微かな片鱗であるとはいえ、やはりサヴァランが味覚について述べた要素と重なる部分を持っている。例えば、サヴァランが『味の生理学』で断食について述べた「われわれの快樂の要素はいつも困難と欠乏と享樂との三つである⁽⁵⁷⁾」の言葉は、そのままジェネジックに置き換えられるものであろう。ルシーは、馬車で乗り合わせたにすぎない年若い娘で、次の目的地に向けての出発を急いでいた。この、年齢差や時間的な拘束を含めた状況は、大人同士の恋愛と比較するとやはり「困難」を伴うだろう。望みつつも自ら行動に移さなかった（＝「欠乏」）ゆえに、この娘が図らずも宿を訪ねてきた際に、大きな喜びを感じたことを語り手は隠さない。そして、この娘との官能的なひととき（＝「享樂」）を過ごすこととなる。

(50) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(51) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(52) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(53) 『美味礼讃』上巻, p. 60. (P. G., p. 45).

(54) 『美味礼讃』上巻, p. 195. (P. G., p. 141).

(55) 『美味礼讃』上巻, p. 196. (P. G., p. 141).

(56) 『美味礼讃』上巻, p. 207. (P. G., p. 149).

(57) 『美味礼讃』下巻, p. 73. (P. G., p. 242).

しかしその快楽は、官能的でありながらも理性的な観察と節制に満ちている。いみじくもサヴァランがグルマンについて「こういう人たちこそ真に哲学的な注意をもって味わい、その道の研究のために求められるだけの時を惜しみなく与え、理性が食欲に向かって『これよりも先に行くな』と命じる一瞬のあることを決して忘れないのだ⁽⁵⁸⁾」と述べた言葉に重なるかのように、享楽に溺れることなく「これ以上この状況を引き延ばせば、どうなるのか想像し、そのような覚悟のなかった私ははっとした⁽⁵⁹⁾」との描写に正にあらわれているように、節制される。

また、『味覚の生理学』の中には、味覚を喜ばせる快楽の要素として、初めて味わう食べものが数多く現れる。例えば、「長い朝食」で伯父たちに振る舞ったトーストやお茶、パルメザンチーズ、辛口のマデラ酒、パンチなど⁽⁶⁰⁾については、彼らがそれまで味わったことのないものを喜ぶ様子が描かれる。さらに「ヴァリエテ」において、レカミエ夫人に神父をして「わたしの食事の中にはたぶんあなたのご承知のないものがございましょう⁽⁶¹⁾」と言わしめたオムレツなどがそうである。この掌編においても、少女は純潔で無垢な状態であり、語り手との一連の行為は彼女の初体験を物語っていることは明らかである。一方、語り手は、行為における少女の体を「私のために設えられたかのような、心地よく整った小さな空間」と比喩的に表現し「私のためだけの場所」と語る⁽⁶²⁾。語り手自身にとってもその「初めて」がいかに快楽を高揚させる要素であるかが強調されている。さらに、『味覚の生理学』でサヴァランが常に強調した「分かち合う」喜び、つまり「食卓の快楽」もこの掌編では、忘れられることはない。物語の冒頭部分、語り手を訪ねてきたルシーに「ちゃんとしたキスというのは、与えるキスと、返されるキスの両方で成り立つもの⁽⁶³⁾」と語る時点から、この「分かち合う」姿勢は一貫している。そして、医学用語を駆使し、詳細に描写された官能は、しかし一方的で自己中心的な欲求の充足ではない。語り手は、「教授」の目を持って、相手を注意深く「観察」する。そして、言葉は発されずとも、少女の「そっと開」いた口元から、彼女が快楽を感じていることを「心地よく伝え」られるのである。語り手は、「自身の昂ぶりが共有された⁽⁶⁴⁾」*« mes transports étaient partagés »*ことを理解し、相手に「嵐の到来が起きつつある⁽⁶⁵⁾」*« l'orage se formait »*と察する。

つまり、サヴァランは、会食者との楽しみの時間を「食卓の快楽」として、「食べる快楽」から区別したように、ジェネジックにおいても、単なる欲求の充足から相手といかに快楽を分かち

(58) 『美味礼讃』下巻, p. 136. (*P. G.*, p. 289).

(59) *« Et cette idée qui me fit envisager les suites d'une plus longue insistance à laquelle je n'étais plus préparé, me métamorphosa à l'instant. »* Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 570.

(60) 『美味礼讃』上巻, p. 249-251. (*P. G.*, p. 178-180).

(61) 『美味礼讃』下巻, p. 162. (*P. G.*, p. 308).

(62) Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 569.

(63) *Ibid.*, p. 568.

(64) *Ibid.*, p. 570.

(65) *Ibid.*

合うか、という点を最も重要と考えるのである。語り手は、相手の様子を確認し、その時を見極め、「引き金を引⁽⁶⁶⁾」*« je donnai le coup de feu »*く。そして、サン＝カンタンの地に、「重なり合いひとつとなった二つの嵐が炸裂⁽⁶⁷⁾」*« un double orage éclata sur Saint-Quentin »*するのである。まさにここで、快楽の「分かち合い」がなされたことが、明確に述べられている。

この官能小説において、サヴァランは、生理学的な細かい描写をもって官能をつぶさに描いた。しかしながら、そこに下品さは見受けられない⁽⁶⁸⁾。その官能描写には、相手に対する細やかな気遣いが表現されている。そもそも馬車で乗り合わせた段階において、語り手の、広義でのジェネジックは機能していたといえるだろう。また、「旅の間にあなたが私に示してくださった、たくさんのお気遣いを思い出してお願いにきました⁽⁶⁹⁾」とルシーをして言わしめ、彼女が同じ街に伯母がいるにもかかわらず、荷物を口実にわざわざ語り手の部屋を訪れたという事実も、この「恋愛期間や恋愛の駆け引きまでも含む」ジェネジックゆえであるといえるのではないか。サヴァランは、『味覚の生理学』において、長らく卑俗なものとされてきた「味覚」を生理学的に分析しつつ、その快楽を軽やかに肯定した。その巧みさが、この官能小説においても「ジェネジック」に関して、遺憾無く発揮されていると言えるだろう。この掌編は、もちろん、サヴァランの考える、数あるジェネジックの一形態に過ぎない。しかし、ここにはすでに、「ジェネジック *génésique* の生理学」が描かれているのである。

おわりに

サヴァランは、人間の五感に加えられる第六の感覚として「生殖感覚」を定義することを望み、『味覚の生理学』冒頭でその意思を明らかにした。そしてそれを表す言葉に、当時、医学文献において使用の認められた「生成」を意味する語、ジェネジックを使用した。そこには、味覚に対して行ったように「生成」につながる行為の全てを多角的に分析したいというサヴァランの意図が感じられた。それを体系的にまとめることが叶わなかったサヴァランではあったが、彼の残した官能小説の中において、その片鱗をうかがうことができた。そしてその官能小説は、サヴァランが味覚において強調した「食卓の快楽」に通じるような、節制を基本とした、分かち合う喜びを感じさせる。

官能小説は当時珍しいものではなく、大革命前にはサドを筆頭に多くの好色小説が匿名で出版されていた。サドの唯物論的思想は、必ずしもサヴァランの思想と対立するものではないが、そ

(66) *Ibid.*

(67) *Ibid.*

(68) マルセル・ルフは「内容はふしだらで軽やかでフランス的なユーモアに富みつつも、決して下品ではなかった」と述べている。*« ...ces nouvelles étaient grivoises, légères, gauloises, jamais sales »*, Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 566.

(69) Marcel Rouff, *op. cit.*, p. 568.

の官能の描き方、ジェネジックにかんしては、大きな隔たりがあるように思われる。グルマン・ディーズとコケットリを重ねるならば、まさにサヴァランが否定した「暴飲暴食」にあたる、サドが著したような放蕩や過剰、性の横溢は「サン＝カンタンの宿場」には見当たらない。革命前後のリベルタン小説との具体的な比較により、『味覚の生理学』における、ジェネジックを含むサヴァランの思想についてさらに掘り下げることが可能と思われる。今後の課題としたい。

補 遺

試訳⁽⁷⁰⁾

「サン＝カンタンの宿場」（「アラスへの旅」からの抜粋）

いよいよ何もすることがなくなり、私は、出発のことを考えながら、朝、部屋でぼんやりと物思いにふけておりました。するとかわいらしい「トントン」という音が私の扉を叩き、はっと我に返りました。急いで扉を開いてみると、なんたる至上の喜び、そこにはルシーがいたのです。そう、ルシーが。

「なんと、あなただったのですか。愛しい天使さん。」と私は彼女を引き寄せながら言いました。「もう2度と会えないと思っていましたよ。ずっとあなたのことを考えていたのです。あなたのことをね。」

彼女は頬を赤らめながらこう言いました。「ごめんなさい、とっても困っているのです。今すぐ出発する郵便馬車に席を取ってあるのですが、私の荷物がどうなってしまったかまったくわからなくて…どうしてもなくしたくないのです。それで、旅の間にあなたが私に示してくださった、たくさんのお気遣いを思い出してお願いに來ました。もし届いたら、送ってくださいますか？そして、もし届かなければ、あなたのご自分のものならどうなさるか、そのようにしていただければと思って…」

「意地悪な人ですね。あなたは、私がどれほど喜んであなたのお役に立てるか、よくご存じでしょうに。ですが、よく考えてください、これではまるで私が荷物の使い走りではありませんか。となると、当然心付けをいただかなくては。三回のちゃんとしたキスを頂いたとしても多すぎることはないですよ。」

(70) 「サン＝カンタンの宿場」については既訳が存在しないため、筆者がここに全文を翻訳した。この小説の初出である、サヴァランの没後100年にメルキユール・ド・フランスに発表されたマルセル・ルフの論考「ブリヤ＝サヴァラン、1826年2月1日にパリで没する」に載せられた作品を原文とする。Marcel Rouff, article « Brillat-Savarin mort à Paris le 1^{er} février 1826 », *Mercure de France*, n° 663, t. CLXXXV, 1^{er} février 1926, p. 545-571.

「まあ、なんですって？ そんなこと初耳ですわ。」

「でもそれは、世界が始まったときからある古い風習ですよ。ちゃんとしたキスというのは、与えるキスと、返されるキスの両方で成り立つものです。」

こんな会話を交わしながら、私は彼女を腕の中に抱き寄せました。そして少しの抵抗ののち、彼女はこの世で最も愛らしい唇を私に許してくれました。

かわいそうに彼女は、その口づけにどれほど私を酔わせる力があるか、まだ知らなかったのです。私はその口づけすべての甘美な力を全身で感じており、彼女はそうしようと思ったわけではないのかもしれませんが、ずっと前から、すでに私のご褒美は得られていたのです。ところがそのとき、彼女の瞳が潤みはじめ、彼女の薔薇色の頬の中に白百合のような蒼白さが混じっていくのに私は気づきました…。

(教授たるもの、決してこういった観察を無駄に行ったわけではないのです。)

.....

奥様方、もしあなたがこの一行半を満たそうとしたら、三日はかかるでしょう。そしてこの主題は非常に淫らできわどく、想像力を刺激し、感覚に火をつけるかもしれません。そのような興奮の最中に、もしも悪魔があなたの扉をノックしたとしたら…さて、あなたはその扉を開けないと言い切れますか？

正直なところ、私は自分の罪だけで手一杯です。遠くの誰かの罪まで背負う気などありません。

ですから、ここで私は何もかも言ってしまうつもりです。もし、あまりに生真面目な魂がこれを読んでいたら、今すぐ目を塞ぐことをおすすめします。どんなにためになる読書を重ねてきたとしても、これから語られるようなことは、おそらく聞いたことがないでしょうから…。

.....

ルシーは、私の腕の中でうっとりと身を預けていました。顔は青ざめ、目は閉じられ、頬には血の気がなく、けれども、彼女の胸は激しく脈打っていました。それこそが、気絶と卒倒の違いを示す決定的な要素です。この状態は、私にとっては初めてのことでなく、そのときに何をすべきかも知っていました。そして男の名誉という厳格な掟が、私にある対処法を強いたのです。私はそれに、迷うことなく従いました。

私はベッドの上に、治癒のために最も適した姿勢で、愛おしい病人を横たえました。そして、回復の妨げとなるすべての覆いを取り去りました。目の前に現れた至宝に心を奪われながら、この善き行いに魅力を授けてくださった神を讃えました。先を急いだのは、どんな準備ももはや無用、場合によっては危ういことですらあると、ぼんやりと感じたからでした。

私は準備万端でこの美しい治療に臨み、やがて、それがまるで私のために設えられたかのよう

な、心地よく整った小さな空間に身を落ち着けました。私のためだけの場所であるという感覚は、以前何度かそうではなかった場所に出会った経験を思い出させ、なおさら私の気持ちを高揚させました。

私が処置を始めようとしたとき、ルシーはうっすらと目を開けましたが、すぐにまた閉じました。それはまだ意識が完全に戻っていなかったからなのか、それともすでに私に抗うには遅すぎると悟ったのか、あるいは、我々人間が切り離すことのできない、ある密かな本能によって、今や必要となってしまう治療の効果を妨げることを心配したのかもしれませんが。

ですから私は、慌てた見習い医のようにではなく、経験豊かで熟練の医師のように慎重に動きました。目的へと着実に進みながら、経験から「何事にも時間が必要だ」と知っている者の落ち着きを持って。

これほど丁寧に施された治療が、功を奏さないはずはありませんでした。ルシーは目を開けることはありませんでしたが、彼女の頬には再び薔薇のような色が戻り、唇には珊瑚の赤みが宿り始めました。言葉は発さずとも、その愛らしい口元はそっと開き、私の行いが決して無駄ではなかったのだと、何よりも心地よく伝えてくれました。これらの出来事が北半球で起こっていた間、反対側の南半球においても同じくらい興味深い出来事が起こっていたのです。

ますます強くなる圧力が、私に告げていました。私は、また生命の源を開いてしまったのだと。まるで失われた純潔が、その聖域に舞い戻ろうとしているかのようでした。

まもなく、ほとんど感じ取れないほどかすかな動きから、私の昂ぶりが共鳴していたことがわかったのです。やがて、内なる震えや途切れ途切れの吐息が、嵐の到来が起きつつあることを知らせました…激しい痙攣が、それが時であることとを告げました…私は引き金を引いたのです…快楽の時ははっきりと鳴り響き、サン＝カンタンの上に、重なり合いひとつとなった二つの嵐が炸裂しました。

愛らしく、いとしい娘よ！その不器用な抵抗の仕方に、処女の清らかな魅力に、激しい感情の高まりに、そして何より、忘我が過ぎ去ったあと、言葉に尽くせないほどの優美さで私に言ったあのひと言―「まあ、神さま…私たちは永遠にお別れしてしまうのですね」―それらすべてに対して、天が彼女に最も優しい恵みを授けてくれますように。

私はそっと彼女をなでながら応えましたが、ふとそのとき、先ほどの熱情のなかで、私が一方の乳房にだけ注意を向けてしまい、もう一方の、それも数千の敬意を払うに値するものをすっかり見落としていたことに気づいたのです。

ルシーは、私がそれに気づいてしまったことによる影響を心配したのでしょうか。というのも、彼女はまるで自分から話しかけるのではなく、私の言葉に応えるかのような口ぶりで、こう言ったのです。「ええ、よくわかりました。あなたは、どうしても伯母からの訪問を望んでいるのですね。」

この一言で、ふと我に返りました。もしこれ以上この状況を引き延ばせば、どうなるのか想像し、そのような覚悟のなかった私ははっとしたのです。

その後、私たちは何が起こったのかを物語るような彼女の乱れた服装を整えました。もちろん手間取りながらではありましたが、彼女は私に、恥じらいと優しさの入り混じった眼差しを向け、私の腕をとって、一緒に外へ出ました。

道すがら、彼女は私にこう言いました。「もしあなたが、時おりルシーのことを思い出すことがあったら、どうかあまり厳しくご判断なさらないで。私、自分に起こることを予想できませんでした。あなたが私をどれほど動揺させたかは、まるで災難のようで、文句を言いたい気持ちはあるのですが、自分を責めるほどの過ちだったとは思えないんです。」

私は彼女に視線で応えました。なぜなら、ちょうどそのとき、目的地に着いてしまったからです。そして、私たちのあいだに交わされた、そのまなざしの「言語」は、言葉にはなりませんでした。

なんとか間に合いました。馬車は玄関前に停まり、伯母が戸口に立っていました。彼女は背が高く、痩せて年老いていて、顔色も暗く、いかにも小言を言いたげな様子でした。しかし、私の髪に混じった白髪と高い背丈、そして勲章を見ると、彼女の顔つきは変わり、私の親切に対してあふれんばかりの感謝の言葉を並べはじめたのです。私はすでに十分に報われていたというのに。

馬車は出発の時間に追われており、私たちも急いだため、別れの儀式は簡潔に済みました。私はルシーを馬車に乗せ、お別れのキスをし、伯母に一礼して、そして私たちは別れたのでした。